

高等学校総合学科におけるカリキュラムマネジメントの一事例
— 大学進学希望者の比率の高い総合学科における「課題研究」を中心に —

五味仁志¹ 棚野勝文²

(¹兵庫県立須磨友が丘高等学校 ²岐阜大学大学院教育学研究科)

A Case Study on Curriculum Management

— Focusing on "Project Study" in a High School Integrated Course
with a High Percentage of Application to Tertiary Education —

¹Hitoshi Gomi ²Katsunori Tanano

I 目的

平成6年に全国で7校が設置されスタートした高等学校総合学科（以下、「総合学科高校」と記す）も、平成30年度には358校となった。多くの総合学科高校は、普通科あるいは専門学科から総合学科に改編された歴史を持ち、前身がどのような学科であったかが改編後の特色化にも大きく影響⁽¹⁾している。現在、総合学科高校は、前身の高校の教育を継承しながら、総合学科高校として教育上の特色や設置の意義、教育課程の編成等を押さえた上で、多様な特色を持った高校として教育活動を展開しているといえる。

一方、設置後20年以上が経過した現在においても、総合学科高校の教育内容に関して一般的な理解度が低いことが課題として挙げられる。平成23年の中央教育審議会答申（以下、「中教審答申」と記す）『今後の学校教育におけるキャリア教育・職業教育の在り方』において、「中学生及びその保護者の総合学科に対する理解や認知度が低い」「中学校の教職員の総合学科に対する理解が不十分である」など、総合学科高校に対する中学生、保護者、中学校教職員への理解度が課題として指摘されている。確かに、普通科と総合学科の教育課程については、その違いを本来の総合学科の教育上の特色や設置の意義、教育課程の編成等から明確に差別化できる。そして、学校説明会やホームページ等で広報を重ね、中学校や塾において説明会を開催することで、毎年、中学生、保護者、中学校教職員、塾等への理解は一定程度進めることは可能である。しかし、現実として、説明会などで理解が進んでも、中学3年生、保護者は毎年変わるため総合学科の理解定着の難しい面も否めない。文部科学省の政策では、総合学科の展開について、約500校程度を目指していた可能性がある⁽²⁾が、現在、358校にとどまっている背景の一つとして、この総合学科高校の教育に対する一般的な理解度が低いことがあげられると考える。

さまざまな特色を持つ総合学科高校に共通した具体的課題解決方法を提示することは容易ではない。しかし、キャリア教育を教育活動の根幹に置く総合学科高校では、生徒の多様なニーズに対応しながら、学ぶ生徒の満足感を“生きる力”に変換し、可視化できる成果として示していくこと、生徒自身が自己の成長を実感でき、次への成長の具体的な糧にできる教育活動の展開が、多様な総合学科高校共通の課題解決方法であると考えられる。例えば、ある総合学科高校の生徒が、その教育活動を通して、ある職業分野のオーソリティ(第一人者)になりたいという目標を定めて、卒業後も継続的に努力していくことができたとしたら、それは立派な成果の一つである。そのためには、あらゆる教育活動をキャリア育成の一環と捉えている総合学科高校で、生徒個々の今後の人生の生き方を支える資質・能力を育成し、持続可能な力の定着を図り、その成果の可視化を目指すことが重要であると捉える。

本論文は、このような課題認識に立ち教育成果の可視化による総合学科高等学校の教育効果の向上を目指した、兵庫県立須磨友が丘高等学校（以下、「須磨友が丘高校」と記す）におけるカリキュラムマネジメント実践事例を検証するとともに、実践上の課題を明らかにすることを目的とする。

II 総合学科高校の現状

現在の総合学科高校は、多様なニーズを持つ生徒を受け入れており、その生徒の興味・関心に応えるべく、各校の設立時の背景や地域性とも関連しながら、高校ごとに専門化・特色化が進んでいることが大きな特徴である。そこで、本節では、現在の総合学科高校を概括的に理解するために、近畿地区において総合学科高校を対象とした、平成 29 年度の近畿地区総合学科高等学校調査研究の集計結果を利用し、現在の総合学科高校の状況を簡潔に整理する。

平成 29 年度近畿地区総合学科高等学校調査研究では、近畿地区の総合学科 56 校を、それぞれの学校の持つ特色、多様な在校生のニーズに応じて、各校の判断により 4 グループ (A: 主に大学進学をめざすグループ(10校)、B: 進学・就職を共にめざすグループ(23校)、C: 工業・農業・商業の系列に特色を持つグループ(14校)、D: 学び直しを大切にするグループ(9校)) に分けて生徒への質問紙調査を行い、52 校から回答を得た (「図表 1」参照)。

質問紙の設問内容は、設問 1 が「総合学科の学び全体」について、設問 2～5 が「科目選択」について、設問 6～7 が「産業社会と人間の内容」について、設問 8～10 が「総合学科の行事や取り組み」について、設問 11 が「施設・設備」についてとなっており、回答は 4 件法「A: よく当てはまる」「B: やや当てはまる」「C: あまり当てはまらない」「D: まったく当てはまらない」とした。分析方法は、「A: よく当てはまる」「B: やや当てはまる」と回答した割合の合計を「満足率」と捉えて考察した。

分析の結果、A、B、C グループでは、「設問 11 学校の施設・設備に満足できた」を除き、全項目で 70% を超える満足率を示した。D グループは、A、B、C グループと比較して、総じて満足率は低くなっているが、満足率が 50% を下回る項目は設問 11 だけである。設問 11 の施設・設備に関する満足率が全グループにおいて比較的低いのは、各校の施設・設備がそもそも総合学科高校として設計されたものでなく、総合学科高校の前身であった高校の施設・設備を利用していることに起因していると推察できる。

「設問 1 総合学科で学んで良かった」については、全校合計満足率 86% であり、グループ別でも A: 86%、B: 86%、C: 91%、D: 78% と、C グループの 91% を筆頭にすべてのグループにおいて高い満足率であった。これは、さまざまな特色をもつ総合学科高校であるが、「設問 4 科目選択については、選びたい科目を選べた」全体合計満足率 78%、「設問 9 総合学科の様々な取り組みで、自分で考える力や自主性を伸ばすことが出来た。」全体合計満足率 77% と、生徒の科目選択の満足率や課題研究、学校や年次の行事や活動、ひいては進路実現における“主体的な選択”の場面における満足率が高いことなどが要因となっていると考えられる。

この調査結果から、近畿地区における総合学科高校は、各校に応じた専門化・特色化が進む中で、多様なニーズを持つ生徒の興味・関心に応じた教育活動を展開し、かつ生徒からその教育活動に高い満足を得ていることが理解できる。

III 須磨友が丘高校の概要

本論文は、須磨友が丘高等学校におけるカリキュラムマネジメントの実践事例が中心になることから、ここで、須磨友が丘高校の概要を整理する (「図表 2」参照)。

須磨友が丘高校は、神戸市須磨区の新興住宅街に昭和 58 年に兵庫県立普通科高校として開校し、平成 14 年総合学科に改編され、平成 30 年に創立 36 年目を向かえた総合学科単科高校である。生徒定員は、全校で 720 名 (40 名×6 クラス×3 年次) であり、過去 4 年間の進路実績は、4 年制大学 71.9%、短期大学 6.5%、専門学校 13.2%、民間就職 1.3%、公務員 1.1%、浪人・その他 6.0% と、多くの生徒が上級学校への進学を目指しているいわゆる進学型の高校である。

その他、地域の自治会や施設とも連携が強く地域貢献活動、ボランティア活動等も盛んである。また、隔年行事としてアメリカポートランド州立大での語学研修(1・2年次 20～30名、2週間)や、毎年実施される約30社ある中から1社を訪問し研究する職場研究(1年次全員)、プレゼンや論文作成のスキルアップ研修、種々の講演会等総合学科高校として特色ある行事を多数実施している。これらの概要から、前述の平成29年度近畿地区総合学科高等学校調査研究においては、須磨友が丘高校は、主にAグループである大学進学をめざすグループとした。

IV カリキュラムマネジメント

在校生の満足率が高い総合学科高校にお課題として、中学生、保護者、中学校教諭への総合学科への理解定着が進まない点があげられる。この課題を解決する方法のひとつとして、学ぶ生徒の今ある高い満足感を“生きる力”に変換し、可視化できる成果として示していくこと、生徒自身が自己の成長を実感でき、次への成長の具体的な糧にできることであると考えた。

以下に、主に大学進学をめざす(大学進学希望者の比率が高い)須磨友が丘高校において、この課題解決を目指し、1. 教育課程の特色化、2. 新しい入学者選抜への活用及び高大接続改革や新学習指導要領における「主体性等」の評価、3. 組織の改編と教員の負担軽減、4. 進路ガイダンス機能の強化の4点について取り組んだカリキュラムマネジメントを提示する。

1. 教育課程の特色化 — 「課題研究」の取り組み—

「課題研究」は、学習指導要領により、総合学科における原則履修科目(2単位から4単位)として設置されている。須磨友が丘高校においても、これまで2年次で1単位「課題研究Ⅰ」を履修し、3年次で2単位「課題研究Ⅱ」を履修してきた。しかし、ここ数年須磨友が丘高校では、より機能的で実効性の高い、教員の負担軽減にもつながる「課題研究」の配置・内容を検討してきた経緯があり、大学入学者選抜改革や高等学校学習指導要領の全面改訂は、「課題研究」を中心に据えたカリキュラムマネジメントの絶好の機会となった。以下にその具体を示す。

a 「課題研究」におけるカリキュラムマネジメント

平成30年度入学生から、2年次「課題研究Ⅰ」1単位、3年次「課題研究Ⅱ」2単位履修であった、課題研究を2年次「課題研究Ⅰ」2単位履修、3年次「課題研究Ⅱ」1単位履修とする。

①本カリキュラム変更は、総合学科教育の中核とも言える授業である課題研究の授業時間数を増やし、よ

(図表2) 須磨友が丘高校の概要

- 校訓:知・考・行
- 学校教育目標:生徒個々のキャリア育成を根幹に据えた総合学科教育の推進
- 教職員数:97名(含非常勤講師)
- 生徒数: (男女比=概ね3:4)
各年次6クラス(全18クラス)720名定員
- 選択科目数:90科目超
- 特色ある授業:
 - ①クロスカリキュラム(教科横断的授業)
 - ②2、3年次共修の授業
 - ・フィールドワーク(神戸学など)
 - ・特別非常勤講師による専門授業
臨床哲学、異文化理解、
スポーツ医療と栄養など
- 入学者選抜: 定員の50%ずつの募集
推薦入学(2月)、学力検査(3月)、
- 進路実績(過去4年間の平均):
4年制大学 71.9%(国公立 4.4%)、短大 6.5%、
専門学校 13.2%、民間就職 1.3%、
公務員 1.1%、浪人・その他 6.0%
- 部活動の過去3年間の実績
 - ・全国大会出場:ウエイトリフティング、陸上競技、
男子バレー、馬術
 - ・近畿(関西)大会出場:水泳、書道、吹奏楽
- その他顕著な取り組み:
中高生 Web コンテスト全国金賞
田辺聖子文学館ジュニア文学賞文科大臣賞

り集中できる環境を整備することが目的である。須磨友が丘高校では、3年次における実授業週数は平均して年間25週、1、2年次の実授業週数は同じく31週であり、2年次に2単位とすることで、平成30年度入学生以降は「課題研究」の在学中の授業時間数合計が実質で6時間の純増となる（(2時間×32週+1時間×26週)−(1時間×32週+2時間×26週)=6時間）。

②「課題研究Ⅱ」は3年次のカリキュラムの中で1単位、週1時間で行なうが、この1時間は生徒個々の主体的で多様な活動を計画する。例えば、2年次で終了した「課題研究Ⅰ」を、進路実現に活用できるようさらに深化させた学びが可能な時間とする。

「課題研究Ⅰ」「課題研究Ⅱ」における生徒の学習成果は、ポートフォリオとして大学進学時における新しい入学者選抜の総合型選抜や学校推薦型選抜さらには一般選抜でも評価の対象となるなどの期待も可能である。また、生徒が「課題研究Ⅰ」で培った知識や技能、論理的な思考力・判断力・表現力等を「クロスカリキュラム」等の授業で活用し深化を図ることも期待できる。

この「課題研究」のカリキュラム変更は、総合学科高校における「課題研究」の学びを高校生活最後の完了した学びとせず、学習成果をさらに深化させ、進路選択への反映はもちろん、職業選択や生涯学習をも見据えた“持続可能性を残す学び”の実現を期待したカリキュラムマネジメントである。

2. 新しい入学者選抜への活用及び高大接続改革や新学習指導要領における「主体性等」の評価

「課題研究」のカリキュラム変更は、課題解決に向けた取り組みである「新しい入学者選抜に活用」、「高大接続改革や新学習指導要領における「主体性等」の評価」への対応も兼ねている。課題研究年間計画において、2年次の授業時間が増えたことで内容の充実が期待でき、さらには、一年間を5つのTermに分けて実施できるため、3年次の大学入学者選抜に活用できるポートフォリオの作成が、2年次当初から可能になる。さらに、「図表3」のルーブリックを用いた評価などの「主体性等」の評価に取り組む時間を作ることができるため、「図表4」に示す“振り返り”の質を高め、生徒自身が自己の成長を実感できる機会を増やすことが可能となることを目指したカリキュラムマネジメントである。

3. 組織の改編と教員の負担軽減

a 「課題研究Ⅰ」を2年次のカリキュラムの中の選択群に配置

①2年次に「課題研究Ⅰ」を2単位に増単して行なうため、バランスをとるために、2年次において他の科目の授業時間数を減らすことや7校時のぶらさげを1日増やすことも検討したが、基礎学力の定着、また、部活動時間の確保という観点から、教員における共通理解は得られなかった。そこで、週1時間の授業時間数確保を単純に他の科目を減単したり7校時のぶらさげを増やしたりせずに行なうための手段、

(図表3) 評価例1<ルーブリック>

	①習得 基本的知識・技能の習得	②関わり コミュニケーションスキル	③態度 学習に取り組む姿勢
5点	・問題解決に必要な応用的知識・技能を習得し、それらを自在に使いこなすことができ、さらに工夫を加え、新たな問題にチャレンジし、解決を図れた。	リーダーシップを発揮し、グループ間で情報を交換・共有するなど、みんなが理解できるように積極的に取り組んだ。	新たな問題の解決に向けて、その方向性を見出すため、教科書や資料集などを十分に活用し、考え、理解を深めようとした。
4点			
3点	問題解決に必要な基本的知識・技能を習得し、それらを使い提示された問題を解決できた。	3人以上のグループで、話し合い、教え合い、協力し、グループ内で理解できるように取り組んだ。	与えられた資料を熟読し、積極的に学習内容を理解しようとし、意欲的に取り組んだ。
2点			
1点	基本的な知識・技能を理解できず習得を図ることも難しかった。	ひとりで取り組んだ。	学習への取り組みが消極的で、意欲に欠けた。

(図表4) 評価例2<リフレクション(気づき)カード>

月 日() 本日の授業()
A 本日の授業で「理解できたこと」や「良かったこと」
B 本日の授業で「わからなかったこと」や「悪かったこと」
C 次の授業に向けて改善すること、継続すること、感想、質問、意見など
O 学習前・中・後を振り返ってみて、何がわかって何ができるようになりましたか。
担当者評価

さらには、1 学年生徒数 240 名に対し 120 台しかない PC を一人 1 台常用できる手段として、「課題研究 I」の須磨友が丘高校のカリキュラムに設置されている既存の選択科目群への配置を計画した。

②2019 年度実施教育課程表（「図表 5」参照）では、2 年次の選択群が 4 つ(A~D)配置(4×2 単位)されている。生徒は、年度当初に分掌された系列に所属する教員が開校するゼミを選択して、そのゼミの大テーマの中で個々に課題研究のテーマを設定する。

(図表 5) 2019 年度実施教育課程表

平成 31 年度 実施教育課程

兵庫県立須磨友が丘高等学校
*: 必修科目

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
1年 37 回生	*国語総合		*現代社会		*数学 I		数学 A		*化学基礎		*体育		*保健	*音楽 I	*美術 I	*コミュニケーション英語 I	英語表現 I	*家庭基礎	*社会と情報	*産業社会と人間	L H R										
2年 (36 回生)	実践国語		数学 II		*物理基礎	物理					コミュニケーション英語 II	英語表現 II	化学	*地理 B	選択 C	選択 D															
	現代文 B	古典 B			*生物基礎	生物							選択 A	選択 B																	
			*世界史 B										*課題研究①	*課題研究②	*課題研究③	*課題研究④															
													数学 II	数学 B	数学 B																
													言語表現	発展国語	英文講義	発展国語															
													英文講義	英文講義	ステップアップ英語 a	英文講義															
													ステップアップ英語	基礎英語	生物	基礎英語															
													日本の地域	実用英語	絵画	実用英語															
													IT実践	総合数学 AZ	子どもの発達と保育	総合数学 AZ															
													経済入門	経済入門	ワークベース制作	経済入門															
												倫理	倫理	倫理																	
												仮名の書	仮名の書	デザイン	デザイン																
												音楽基礎	音楽基礎	スポーツ I	スポーツ I																
												フード	フード	スポーツ II	スポーツ II																
												デザイン	デザイン	概論	概論																
												ファッション	ファッション	ビジネス	ビジネス																
												スポーツ	スポーツ	基礎	基礎																
												情報処理	情報処理	基礎	基礎																
												タブレット	タブレット	デザイン	デザイン																
												簿記 (4単位)	簿記 (4単位)	簿記 (4単位)	簿記 (4単位)																
												大企業	大企業	大企業	大企業																
												医療と看護	医療と看護	医療と看護	医療と看護																
												和楽器演奏	和楽器演奏	和楽器演奏	和楽器演奏																
												立体造形	立体造形	立体造形	立体造形																
												中国語	中国語	中国語	中国語																
												スペイン語	スペイン語	スペイン語	スペイン語																
												ハンブル	ハンブル	ハンブル	ハンブル																
												現代の医療と看護	現代の医療と看護	現代の医療と看護	現代の医療と看護																
												臨床哲学	臨床哲学	臨床哲学	臨床哲学																
3年 (35 回生)																			選択 Q	選択 R	選択 A	選択 T	選択 C	選択 V							
																			財務会計 I	原簿計算	心理学	情報処理	コンピュータ	経済生活と法							
																			情報の表現と管理	76コースと 27076	3D-CG	スポーツ	子ども文化	IT実践							
																			デザイングラフィック	スポーツ II	栄養	音楽演奏	漢字の書	概論							
																			ソルフージュ	フード	子どもの発達と保育	ベーシック政治	映像で学ぶ歴史	保育音楽							
																			創作書	倫理	素描	日本史	神戸学	実用書							
																			ベーシック政治	ベーシック政治	映像で学ぶ歴史	世界史	ステップアップ英語 B	倫理							
																			日本史	日本史	総合数学	世界の国々	標準英語	ベーシック政治							
																			世界史	発展日本史	AS	物理	英文読解	日本史							
																			テーマ研究	生物	特別講義	長文読解	世界研究	テーマ研究							
																		コミュニケーションの科学	生物探検	標準英語	特別講義	長文読解	世界の国々								
																		生物	化学	英文読解	総合数学 A	国語表現	標準英語								
																		化学探検	物理探検	長文読解	総合数学	国語研究	英文読解								
																		総合数学 BH	総合数学 BH	国語表現	実践英語	国語研究	国語研究								
																		実践英語	総合数学 BH	標準英語	標準英語	標準英語	現代文								
																		標準英語	標準英語	標準英語	標準英語	英文読解	英文読解								
																		英文読解	英文読解	英文読解	英文読解	英文読解	英文読解								
																		国語研究	国語研究	国語研究	国語研究	国語研究	国語研究								
																		現代文	現代文	現代文	現代文	現代文	現代文								
																		古典精読	古典精読	古典精読	古典精読	古典精読	古典精読								
																		化学	総合数学 AM	総合数学 BM	総合数学 AM	総合数学 BM	総合数学 AM	総合数学 BM							
																								物理(継続)							
																								生物(継続)							

「図表 6」は、課題研究におけるある系列の教員が開設するゼミのシラバス例である。A～D の各選択群には、「課題研究①」～「課題研究④」が他の選択科目と同列に配置されており、生徒はいずれかを選択して必履修する。課題研究が選択必履修科目の一つという位置づけになって選択群に入るので、2 単位分(週 2 時間分)の時間において、他の新しい科目の設置や、既存の科目を増単が可能となる。

(図表 6) 課題研究 情報・科学系列	
ゼミ名	未来創造研究所
キーワード	理科、化学、科学、薬学、環境、教育
ゼミの概要	「未来がこんな世界になったらワクワクする」を合い言葉に、過去一現在一未来を繋げながら科学の進歩や論理的思考を養い、素敵な世界を考える。
ゼミの魅力	可能性は無限大、子どもの頃を思い出し、自然な発想で未来を考えよう。
ブックトーク	「だから医者薬を飲まない」和田英樹著 SBクリエイティブ
推薦図書	「科学は未来をひらく」和光学園編集 筑摩書房
メッセージ	一年間かけて何かを仕上げるという経験は、なかなかできないことです。同じやるなら楽しくやらなきゃ損！

4. 進路ガイダンス機能の強化

須磨友が丘高校では、生徒個々の受験大学入試科目との整合性を考慮して、物理的に選択科目の配置を固定する科目も出てくるが、全体的には、基本的に幅広い科目選択の可能性を実現している。

a 「課題研究 I、II」の実施にともない、進路ガイダンス機能を強化

高等学校総合学科において、設定される系列は、学習指導要領により生徒が自己の興味・関心、進路等に基づき選択して履修する総合選択科目を学問分野で分類した科目群の種類で、その科目構成については地域や生徒の実態を考慮しつつ設置者及び学校が定めるとされている。しかし、この定義に依ると、〇〇系列に属する科目を選択した生徒たちを普通科におけるコースや類型と同様の“〇〇系列の生徒”として進路ガイダンスを実施する概念が教員に形成されがちであった。また、これが助長されてしまうのは、“〇〇系列の生徒”として進路ガイダンスを実施する方が、普通科経験が長い教員にとって慣れた方法であり、指導方法が分かりやすいからだと推測できる。一方で、学習指導要領により「総合学科においては、様々な分野の基礎・基本を学習するのに適切な科目が多数開設されるため、地域の人々の要望を踏まえつつ生涯学習機関としての役割を果たすことが期待できること。」と、示されているとおり、普通科のコースや類型設置の意義を理解した上で、総合学科が新しい高等学校教育の在り方を目指して充実した教育を展開すること、さらには高等学校教育が全体として、多様な生徒の持つ多様な能力・適性等に対応できるようになることが、新たに総合学科が設けられた意義である。それには、結果として単位制の普通科等と類似した教育課程を実施していることについても否定することではないが、総合学科だから可能な教育課程の構築を推進することが本来の使命と考える。

b 系列を総合選択科目群の種類として定義せず、系列という学問分野で6つに分類された教員組織を設置

「図表 7」で示すように、系列を担当する教員は数名ずつ系列に所属し、2 年次の選択科目群に配置された系列の課題研究のゼミを一つ担当する。一つのゼミを 10 名～15 名の生徒が選択し、ゼミの大きなテーマ(ゼミ名)の下で生徒個々が課題研究のテーマを決めて課題研究を行なう。生徒は、ゼミ担当教員から、課題研究を行なう上での様々なガイダンスを受ける。

(図表 7) 2 年次の科目選択群と系列担当教員数(一部抜粋)

選択群	A(2)	B(2)	C(2)	D(2)
科目	数学Ⅱ 言語表現 英文購読 IT実践 日本の地域	数学Ⅱ 発展国語 フードデザイン スポーツ概論 音楽基礎	数学B 英文購読 絵画 ウェブページ制作	数学B 英文購読 発展国語 総合数学 ビジネス基礎
系列	課題研究① 国際・社会 人文・教育 芸術・表現	課題研究② 国際・社会 人文・教育 くらし・生活 情報・科学	課題研究③ 情報・科学 芸術・表現 6系列	課題研究④ 国際・社会 人文・教育 情報・科学 医療・保健 くらし・生活 芸術・表現
定員	40	80	40	120
教員	英国社2体1	英国社3家情2	数理2体1	英国社2数理2 家情美術4

c 系列長の分掌

系列長のリーダーシップの下で、系列に属する教員が「図表 8」に示す“系列行事”を具体的に立案、計画・準備し実施する。参加生徒は、必然的に当該系列のゼミで課題研究を行なう生徒が多数になるが、基本的には他系列のゼミで課題研究を行なう生徒の参加も可能である。前述したとおり、課題研究の年間計画においては、一年間を 5 つの Term に分けて講演会や発表会など、系列ごとに様々な行事を企画できるので、系列長も融通をきかせやすく、“系列行事”を進路実現に向けた効果的なガイダンスのきっかけと位置づけることができる。もちろん系列の教員への生徒からの個別の質問や進路相談などの機会も、ますます増えることが予測される。

(図表 8) 2 年次課題研究 年間計画(1 学期分抜粋)

月	4	5	6	7
Term	1st	1st/2nd	2nd	2nd
全体予定	ゼミ決めテーマ研究	テーマ研究ブックトーク	研究①制作①	研究①制作①
系列行事	テーマ研究ブックトーク	ポスターセッション	研究①制作①	講演会
STスキル 知考行	知る力① 課題発見力① まとめる力①	読み込む力 課題発見力① プレゼン力	知る力② 課題発見力② 対話力①	専門知識① 原因追及力① まとめる力②
生徒の活動	テーマ研究 読書 ポスター制作	テーマ研究 読書 ポスター制作	発表 研究① 制作①	研究② 制作②
その他	面談・ガイダンス①	面談・ガイダンス①	面談・ガイダンス②	面談・ガイダンス②
評価 生徒担当者		振り返り① 評価①		振り返り② 評価②

もちろん系列の教員への生徒からの個別の質問や進路相談などの機会も、ますます増えることが予測される。

V まとめ

1. 期待される効果と成果

a 「課題研究」の再構築

そもそも「課題研究」は、学習指導要領では原則 3 年次に履修することとされているが、須磨友が丘高校の取り組みでは 2 年次に重点を置いて取り組み、3 年次に発展的取り組みの時間を設けることにより、「課題研究」の内容の充実度や成果物の完成度を高め、学習過程や活動の様子、Term ごとの成果を蓄積でき、パーソナルポートフォリオを作成するための時間数も確保できる。また、2020 年度からの大学入学者選抜改革における評価への対応が可能になり、「課題研究」が生徒のキャリア育成を含めた進路実現につながる発展的な取り組みとなる。

b 「課題研究」の担当教員の負担軽減と授業効率のアップ

6 つの系列組織それぞれによる指導体制と行事計画立案等が小回りのきく体制下でやり易くなる。それに伴い、「課題研究」もゼミ形式で、生徒が設定するテーマは、担当教員の専門分野を大きく外れない。PC も、一人 1 台を常用できるので効率的である。

c 系列長中心に進路ガイダンス機能、さらには年次縦割り行事の計画・立案

系列長を中心とした系列組織の役割は、進路ガイダンス機能を強化するだけでなく、生徒の興味・関心のある学問分野での 1 年次から 3 年次までの縦割り行事が行える環境を構築できる。3 年次生のリーダーシップの下、2 年次生や 1 年次生のキャリアガイダンスやスキルアップ行事が行なわれるような体制づくりは総合学科としても理想の姿と考える。

d 3 年次の「課題研究Ⅱ」の成果

2 年次の「課題研究Ⅰ」の充実度によるところも大きいですが、3 年次の 1 単位の内容は発展の余地が大きく、実効性の高い活用の可能性が広がる。

e 基礎学力定着に係る普通教科目の授業時間数の増加

「課題研究Ⅰ」の時間は 6 時間増となったが、必履修科目である「課題研究Ⅰ」が 2 年次のカリキュラムの選択科目群に配置されたことにより、選択科目群からの科目選択の幅が 2 単位減ったことになるが、その 2 単位を須磨友が丘高校では基礎学力の定着が不足していた古典の授業時間数増に充てた。

2. 今後の課題

設置 25 年目を迎える総合学科は、不易流行を大切にしながら、総合学科の設置当時の意義や理念を踏ま

えて試行錯誤しながらも、その使命とする教育活動を着実にこなされてきた。現在総合学科は、キャリア形成を核としたその教育活動において、多様化の中に専門深化を図り、置かれたそれぞれの地域との連携を強化しながら特色化を伸ばしている。その中で、本論文は大学進学希望者の比率が高い総合学科である須磨友が丘高校におけるカリキュラムマネジメントを中心に述べてきたが、以下に、大学進学希望者の比率が高い総合学科の課題も含め、現在の総合学科高校が持つ共通の課題を整理する。

a 予算措置

平成 29 年度末時点での全国の総合学科の私立学校数が 24 校(全国の総合学科の 6.7%)しかないことから、総合学科の教育活動には普通科に比べて財源が必要であることが分かる。多種の選択科目を設置し、少人数でも講座を開講するための教員数や教室数の確保、さらに講演会の講師や専門的な知識・技能を持つ講師の招聘、また、体育館や講堂とは別に年次単位の授業や講義ができる施設・設備のいっそうの充実に加えて、総合学科高校でいっそうの効果が期待される“開かれた教育課程”を具現化するためにも、予算措置に格別な配慮が必要である。

b 総合学科の理解

普通科、専門学科、そして第 3 の学科として設置された総合学科の理解については、中学生、保護者、教育関係者等、設置 25 年目を迎える現在でもまだまだ不足感が否めない。それら学校外部の理解度不足以上に、高校教員、特に総合学科高校への勤務経験がない教員の、総合学科への理解については課題が大きい。もちろん、高校教員に対しても、自然に総合学科高校の教育活動の詳しい情報が伝達されるような状況でもない。前述したが、総合学科に勤務し、その中核として総合学科教育の推進に尽力している教員とのギャップはかなり大きい。現在も毎年、総合学科高校教員対象の研修会は開催されているが、県下全教員が悉皆で受講する研修会である初任者研修や 10 年経験者研修のプログラムに、総合学科高校に関する教育活動、カリキュラムの理解を促す研修を加えるべきと考える。加えて、学校ホームページの有効活用なども、大いに実効性・即効性のある広報の手段として工夫していくことも不可欠である。

c 序列化からの脱却

偏差値を尺度とする高等学校間の序列化意識を打破する契機となるという発想の下に設置された総合学科高校ではあるが、現実には、各地域の高校受験という体制の中で必然的に序列化の中に置かれてしまう現実を否定することはできない。しかし、総合学科高校の教育内容や教育活動は、いわゆる進学先(大学等)の序列化に翻弄されないことが大切である。普通科では、有名国公立大学や有名私立大学の合格者数が、高い比率で高等学校教育の評価に直結する現実に対し、キャリア教育を教育の軸とし“偏差値によらない大学選び”を掲げる総合学科教育を貫くこと、そして大学進学も生徒個々のキャリア形成の一過程と捉えた考え方の共通理解を徹底していくことが、結果として総合学科高校の課題である総合学科教育に対する理解度の低さを解決する近道であると考えられる。

【参考・引用文献】

- (1) 阿部英之助・原健司・林萬太郎「高校総合学科における「職業教育度」と「母体校の編成」との関係」『和歌山大学教育学部紀要教育科学』64、2014年、87-96頁、阿部英之助・原健司・林萬太郎「クラスター分析による高校総合学科の類型分析―「普通科型」総合学科の分析を中心として―」『和歌山大学教育学部紀要教育科学』65、2015年、117-131頁、に詳しい。
- (2) 児美川孝一郎「総合学科は生徒にいかなる意識・能力を育てているか―A県B高校での実態調査を踏まえて―」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』14、2017年、162頁